

# とかす力 (八木重吉の詩を愛好する会会報)

事務局（連絡先）〒277-0014 千葉県柏市東 3-8-34 柏第一宣教バプテスト教会  
\*\*\*\*\* 天利武人（教会牧師）電話 04-7164-9159  
（会報編集、ホームページの連絡先）〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継  
\*\*\*\*\* Eメール [kmat27aiko@gmail.com](mailto:kmat27aiko@gmail.com) 携帯電話 09061674553

☆ 第 21 号

☆2020 年（令和 2 年）  
12 月 14 日 発行

## ★ 新型コロナ感染の影響で中止された茶の花忌の集まり

新型コロナ感染のために、八木重吉記念館の開館以来継続してきた茶の花忌の集まりを、今年は中止せざるを得ませんでした。親族に加えて地域の皆様や愛好者を加えた「茶の花忌準備委員会（八木幹夫委員長及び 7 人の委員）」が 3 月に発足し、八木重吉記念館（生家）の佐藤ひろ子様を助けて皆で作る茶の花忌を目指す予定が、まずしたことが、茶の花忌の集いの中止の決定ということで、非常に残念な結果となりました。

八木重吉没後 93 年の今年は、親族中心の墓参となりましたが、昨年司式をしていただいた牧野信次牧師と夫人の恵美子様と子息の義信様がお出でになりました。かつて佐藤ひろ様が通っていた教会の牧師家族と言う親しい付き合いがあります。また私（小林）も、佐藤様と一緒に作り上げた『八木重吉英文日記』の発行が 10 月 26 日になっているので、親族の方々への報告をすべく、参加させて頂きました。

わずか 11 人の墓参の集いではありましたが、牧野牧師から八木重吉の仰瞻（ぎょうせん、つまり仰ぎ見る事）の信仰を示している詩をあげてのお話があり、八木重吉を偲びました。

佐藤ひろ子様の祖父である政三様（重吉の兄）の夫人でん様の実家が阿部家、佐藤ひろ子様のお父様（藤雄様）の夫人葉子様（実家が青木家）の妹にあたる清子様の嫁ぎ先が山崎家、この 2 つの家族の方々が見えていました。なお、葉子夫人つまり佐藤様のお母様は、長らく入院していましたが、今年の 4 月 1 日に亡くなられています。94 歳とのことでした。藤雄様が 3 年前に 92 歳で亡くなられています。八木重吉の甥ご夫妻として、藤雄・葉子夫妻が長生きして、茶の花忌及びこの名称が出来る前の命日の集いを催し、生家及び記念館の管理に当たってきました。本当にありがとうございました、という思いです。

秋晴れの良い日で、秋をこよなく愛した重吉にぴったりの日でしたが、30 分ほどの墓参の集いで解散となりました。コロナ感染がまだ続いているですが、来年はまた八木重吉の愛好者が多く集まる茶の花忌になってほしいと願うばかりです。

## ★ 新発見—1915（大正 4）年の『八木重吉英文日記』刊行

八木重吉命日の 10 月 26 日付けで、『八木重吉英文日記』が出版されました。八木重吉記念館の佐藤ひろ子様が、敷地内にある小屋を整理している中で、古いノートや本の中から発見されたものです。八木重吉記念館の館長代行の役割を果たすべく、記念館内外の整理や保管に力を注ぎながら毎週水曜日に開館している中で、今回貴重な日記を発見されました。全く火事で失われてしまったと思っていた学生時代の書き物の中の 1 冊が出て来たのです。本格的な求道生活が始まる前の、素の姿の重吉（佐藤ひろ子さんの言葉）がよみがえりました。大正 4 年の 1 年の日記が、重吉の生涯を評するうえでどんな意味をもっているのかは、読者それぞれだと思います。一般にイメージする信仰と詩の求道者になっていく以前の重吉であり、癪癪ももっていたけれど総じてはおとなしい孤独な姿をイメージする幼少時代からは成長している若者としての重吉です。今まで皆さんが持っていた八木重吉のイメージが、この 1 年間の日記の記述を知ってどう変わるのか、あるいは変わらないのか興味あるところですね。いずれにしても、今回の発見は、佐藤ひろ子様の大きな功績です。

この発見を機に、佐藤ひろ子様は、記念館と生家の一層の管理と資料保存に努めたいと言っています。是非この本を購入して協力いただければと思います。1 冊 2000 円（税込み）です。以下の 3 か所で本を保管していますので、購入希望者は申し込んでください。

佐藤ひろ子（八木重吉記念館） 〒194-0211 東京都町田市相原町 4473 FAX 042-783-1877

小林正継 〒270-1406 千葉県白井市中 205 電話 090-6167-4553 Eメール [kmat27aiko@gmail.com](mailto:kmat27aiko@gmail.com)

いのちのことば社 〒164-0001 東京都中野区中野 2-1-5 営業部 03-5341-6920 FAX 03-5341-6921

## ★毎日新聞の記事の紹介

毎日新聞 夕刊  
2020年（令和2年）10月20日（火）

〈特集ワイド〉 欄より

声に出して読んでみた。「けつ  
つきりひんまぐつて」のところで  
胸が締め付けられた。気持ちが悪  
い、もどかしくて、ももひきを  
必死でまくり上げる父親の横顔が  
見える気がして。

コロナ禍の今年、八木さんの詩  
と出合い直している。こちらの心  
が弱っている時に限って、すると  
と胸に入ってくるのだ。29歳の若  
さで結核で亡くなった八木さんに  
は闘病中の作品も多い。だからだ  
ろうか、読むと、生きていること  
のいとおしさやありがたさや希望  
（オピニオングループ）

「10月26日の『茶の花忌』は中  
止になりました」。親切な読者の  
方がお手紙をくださった。「茶の  
花忌」は詩人の八木重吉さん（1  
898～1927年）の命日。没  
後93年の今年は新型コロナウイルス  
感染症予防のため、生家「八木重  
吉記念館」で92回続いてきた集い  
を控えるという。

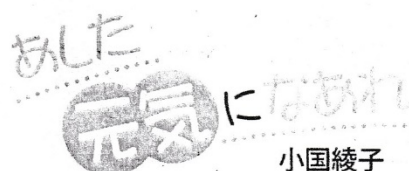
コロナがこんな年だからこそ、

「茶の花忌」を訪れたかったな。

気落ちした私は無性に「茶の花」が

見たくなった。茶畑に花を見るこ

とは珍しい。良い茶葉を得るため



小国綾子



に花芽を摘むから。小さな白いツ  
バキに似ているというその花を、  
どこかで見られないものかしら。  
よく見ると、その封書には、茶  
の花忌中止を告げる八木重吉記念  
館の絵ハガキも同封されてあっ

## 「茶の花忌」におもう

た。晩秋を思わせる空の写真の絵  
ハガキには、八木さんの詩「父」  
が印刷されていた。

△私が三月も入院して 死ぬか  
と言われたのに 癒って国へ帰

で帰るついでに 父は凱旋將軍のよ  
うに俣のわきへついて歩いている  
た 黒い腿引をけつつきりひんま  
くって ああ父をおもうとたまら  
なくなる▽

1919年の暮れ、当時流行し

ていたスペイン風邪にかかり、肺  
炎を併発し、生死をさまよった八  
木さん。この詩は、3カ月の入院  
生活の後、父に付き添われ、ふる  
さとに戻った日の風景だ。

## ★読売新聞の記事の紹介

読売新聞 朝刊  
2020年（令和2年）11月7日（土）  
編集手帳より

### 編集手帳

米国では連日、大統領選  
の票の集計に不満を示す  
トランプ支持者が開票所  
に詰めかけている。怒り  
顔で「選挙を盗むな」と  
叫ぶ人々をテレビで見  
ていて、ふとある年の文化庁の  
「国語に関する世論調査」を思  
い出した◆「琴線に触れる」の  
意を尋ねたところ、「怒りを買  
ってしまふこと」との回答が3  
割にのぼり、本来の意である素  
晴らしいものに触れ、感動や共  
鳴を覚えることだと答えた人と  
拮抗したという◆十数年前の調  
査なので、選挙をめぐる混乱が  
「琴線に触れる」景色に見える  
人はさらに増えているかもしれ  
ない◆辞書編集者の神永暁さん  
は著書「悩ましい国語辞典」に  
一編の詩を引いて、元々のこと  
ばの意をかみしめている。△こ  
の明るさのなかへ／ひとつの素  
朴な琴をおけば／秋の美しさに  
耐へかね／琴はしづかに鳴りい  
だすだらう▽（八木重吉「素朴  
な琴」）。こんなふうには心の琴  
の音を聞くにはまずは静けさが  
必要だろう。コロナ禍のざわざ  
わのなかで生活していると、重  
吉の詩にいっそうの得がたさを  
覚える◆きょう立冬を迎えた。  
暮らして落ち着きを取り戻せな  
いまま、秋もいつてしまった。



★神戸市灘区に住む愛好者、河村梢さんの紹介（河村さんは御影の重吉を紹介する冊子を作製しました。）

六甲のふもと 百年の詩人

山形 梢

（旧姓）

重吉との大切な出会い

八木重吉の詩は、子どものころから大切に読んできました。私の名（梢）は、重吉の詩から両親がつけてくれました（「すべて／もののすえはいい／竹にし／けやきにしろ／そのすえが 空にきえるあたり／ひどくしづかだ」）。

父母は八木重吉の詩を愛好しており、遠い昔の結婚挨拶状には「どこを／断ち切っても／うつくしくあればいいなあ」の詩を記したと聞いています。毎年の年賀状には重吉の詩がひとつ載せられるのが恒例でした。そのときどきの家族のようすにあう詩を父が選ぶのですが、物心つくころから「今年の詩はどんなだろう」と楽しみにしていたことを覚えています。

神戸であじわう重吉の詩

私は神戸で生まれ育ち、いまは石屋川の近くに住んでいます。かつて重吉の暮らした六甲のふもとの街です。重吉の詩が神戸でつくられたと知ったのは、大人になって、重吉に関する本を読み始めてからでした。詩に描かれる山や海や木。以前は、心の風景の言葉として読んでいましたが、神戸を意識して読むと、身近な風景が目に浮かびます。

たとえばこの詩、「松のある 岩山のいただき近く 仰げば／雲の湧く つかみ取れそうな 空の青さ」。まさに目の前にある六甲山そのものです。

またこんな詩もあります。「そんなにひろくない路で／ずっと海の方へつづいてみて／てんきぐあいもこんなにいいなら／こんなみちをいつまでもあるいてみたい（略）」。

坂をのぼり山へ、坂をくだり海へ。私もよくそんな散歩をします。本の中の詩人が、いきいきと自分に重なるようです。

重吉が眺めた六甲の山なみ。よく散歩したであろう石屋川のほとり。白い路。今はなき御影の浜。時には処女塚（おとめづか）の丘に寝そべり、また、酒蔵通りも歩いたかもしれない…。重吉の詩の言葉を借りると、いつもの景色もかがやいて見え、豊かな時間が流れます。

詩の「神戸らしさ」を冊子にまとめる

そんな詩の魅力を周囲の人に伝えたく、神戸の人に八木重吉の詩にふれてもらう機会になればと、小さな冊子「六甲のふもと 百年の詩人-八木重吉の詩 神戸篇-」を手づくりしました。神戸在住期間（1921～1925年）につくられた詩（「八木重吉全集第一巻（筑摩書房）」に収載されています）から「神戸らしさ」を感じられるものを自分なりに選ぶよう試み、詩22篇を収載しました。重吉を初めて知る人のために、重吉と神戸の関わりを年表と地図で紹介するページを加えました。表紙は水彩木版画（石屋川の風景）を自作しました。この冊子の制作を機に、愛好会（小林正継さん）との交流が生まれたことが何よりうれしいです。（少部数しかありませんが、もし冊子に関心をもってくださる方がいればご連絡いただければと思います）。

＊連絡先 〒657-0036 神戸市灘区桜口町 4-1-1-908 河村 梢

おわりに

私はいま1歳の娘を育てています。重吉の子育ての詩に、自身を重ねて読んでいます。娘と石屋川公園を散歩していると、ふと、桃子ちゃんを連れた重吉がそばを通るような気がします。教師の仕事になじめず、世間を好まず、幼いふたりの育児も大変だったかもしれません。それでもやはり、詩作に励み、家族と健康に恵まれた神戸生活は、重吉にとって、かけがえのない充実の日々だったでしょう。

重吉が神戸に暮らして、来年（2021年）でちょうど百年。重吉の詩を通して、百年前の神戸の風景と、ささやかな家族の暮らしを、これからもたくさん発見して味わいたいです。



# イマカナ

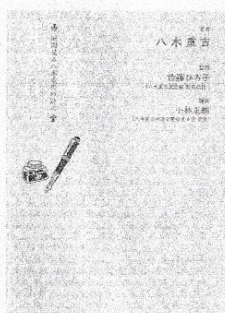
〔 読書 〕

## 今日のお薦め

### 八木重吉の日記を刊行

2年前の暮れ、神奈川にゆかりの深い天折の詩人、八木重吉(1898~1927年)の生家から、重吉が1915(大正4)年に記した英文の日記が発見された。1年を費やした翻訳が完成し、このほど「八木重吉英文日記(佐藤ひろ子監修、小林正継翻訳、いのちのことば社・2000円)」として刊行された。

現在の東京都町田市相原町に生まれた重吉は、英語教師をしながら詩を書き、千葉県の東葛飾中学校に勤めていたころに詩集「秋の瞳」を発表。その後、肺結核のため茅ヶ崎の南湖院に入院し、29歳の若くして世を去った。死後、自選の詩を基に刊行された「貧しき信



徒」は、熱心なキリスト教信仰を土台に、純粋で真摯な求道心が平易な言葉で表現されており、幅広い共感を呼び起こした。日記は、鎌倉にあった神奈川師範学校に在籍していた時期のもので、市販のA5判の日記帳に元日から大みそかまで欠かさず付けられていた。英文で記されたのは、英作文の練習を兼ねるため。つづりや文法のミスが見られるものの、辞書を引くことなく筆記体で

つづられ、学内でもずばぬけた英語力と伝わる重吉の才能の一端がうかがえる。内容は、全寮制で軍隊式教育の師範学校の様子や、休みに帰省した実家での様子、夏休みに東京の英語学校に通ったこと、大正天皇の即位の礼の模様など、105年前の情景を思い起こさせる貴重な資料でもある。淡々と日常を記録する中に、自然の美に感動している描写や、彼の詩のテーマの一つである「哀しみ」「孤独」を感じたなどの記述もあり、重吉の詩心も垣間見える。

神奈川新聞が、11月22日の読書欄で『八木重吉英文日記』を取り上げてくれました。実は昨年秋、八木幹夫氏を通して、まだ注は付いていない段階の翻訳文を見ていただいたところ、貴重な資料の発見だということで、茶の花忌前の10月24日に記事にしてくださいました。

不思議なつながりですが、大正4年の英文日記の1月19日の記述の中に、以下の記述があります。

「貿易」と言う新聞の今日の欄に  
 昨夜の火事は  
 羽衣座の火事だと書いてあった。

この「貿易」とは横浜貿易新聞(この時代は横浜貿易新報と改名していた)であり、現在の神奈川新聞の前身なのです。鎌倉師範学校は軍隊式教育で、生徒たちは長距離を走らされることが多かったのですが、「貿易マラソン」と呼ばれる大会もありました。新聞社が主催あるいは後援していた大会だったのだと思います。

重吉が寄宿舎の図書室で読書をしていたという日記の記述もあるので、おそらく図書館が横浜貿易新報を購入して閲覧できるようになっていて、重吉はそれを見て全国及び世界の情報を吸収していたようです。

## ★ あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中

(募集) 題:「八木重吉との出会いとその詩の魅力」(この内容に沿うなら別のタイトルでもOKです。)

字数: 2000字程度(原稿用紙5枚程度、パソコンのワード歓迎)

締切: なし(随時お送りください)

送り先: メール( [kmat27aiko@gmail.com](mailto:kmat27aiko@gmail.com) )か

郵送で 〒270-1406 千葉県 白井市 中205 小林正継 へ

「八木重吉との出会いとその詩の魅力」は、愛好者の皆様が著者になる本として1冊にまとめたいと思っています。ぜひ原稿を書いて下さい。データとしてまとめてある方は、すぐにでも送って下さい。

## ★八木重吉の詩を愛好する会ホームページ案内

ホームページアドレス <http://www.yagijuaiko.com/> (作成途中の部分があることをご了解下さい)

Eメールアドレス [kmat27aiko@gmail.com](mailto:kmat27aiko@gmail.com) (管理者小林正継)

★愛好会にとっても協力的だった田中敏弘さん(兵庫県三田市在住)が3月に90歳で、又茶の花忌や会の行事によく参加して下さった伊藤かつ子さん(東京都世田谷区在住)が11月に83歳で逝去されました。機会を見て、遺稿等を紹介したいと思います。気づかない内に亡くなられている方々を含め心から哀悼の意を表します。